

# 耕作放棄地で薬用植物



高齢化率が36%を超える東近江市東部の山間地・永源寺地区。地区を拠点とする「農業生産法人永源寺マルベリー」は、過疎化で増える耕作放棄地を活用して、桑などの薬用植物を栽培している。十月には新たに、県内産の五種類の健康原料を使った「近江健康青汁」を発売予定。同社の吉沢克美社長（せむは）「男性の平均寿命日本一の滋賀に『健康』の文化を根付かせたい」と意気込む。

## 東近江「永源寺マルベリー」

吉沢社長は二〇〇三年、高齢化した地域を活性化させるため、「他の地域にはない珍しいことをやろう」と思い立った。糖尿病など生活習慣病の増加が社会問題となる中、かつて地区で養蚕用に栽培されていた桑

(森田真奈子)

が、糖の吸収を抑える性質を持つことに着目。健康食品として販売しようと、翌年に永源寺マルベリーを設立した。

自身が所有する畑を使って栽培を開始。まもなく、地域おこしをからめた取り



## 県産材料「近江健康青汁」10月発売

組みに注目した東京の健康食品の原料業者から声が掛かり、桑のパウダーを年間一トずつ買い取ってもらえることになった。

販売が軌道に乗ると、地域の土地所有者からの栽培依頼も増え、今では桑の栽培面積が十畝に。有機農法で、年間に乾燥状態で十四トほどを生産している。が



県産植物を使用の「近江健康青汁」を開発した吉沢社長と上田さん。地区の高齢者による収穫作業が行われている桑畑。いずれも東近江市永源寺高野町で

新たに販売する近江健康青汁は、独自の商品をさらに充実させようと開発。桑、明日葉に加え、長浜市のヨモギ、草津市の青花、甲賀市の抹茶をブレンドし、無添加ながら、お茶のよつな飲みやすい味を実現した。考案した上田長司生産管理部長（せむは）「せっかく県内に良い素材があるのに、県民に浸透していないのはもったいない。健康のために何かしたいという人に飲んでほしい、素晴らしい地元素材を知ってほしい」と期待する。将来的には、健康志向の高い層をターゲットに、海外展開も目指すという。

令和元年8月29日

高木新聞店  
TEL 0748-22-1541

人。地区の高齢者を多く雇用し、アルバイトは70～80代の住民が中心。市内の就労支援事業所とも連携し、知的障害者に対する就労支援などの仕事を担っている。

農業生産法人永源寺マルベリー 2004年に有限会社として設立。現在は東近江市と甲賀市に計13畝の耕作地を持つ。